

現代トルコにおけるコジヤテペモスクのデザイン変更

山下 王世

キーワード

アンカラ ダロカイ オスマン風モスク

一、はじめに

本稿は、「オスマン風モスク」が現在もなお、トルコの人々の心を捉え続ける要因について考察を試みるものである。具体的には、アンカラ最大規模のコジヤテペモスク（一九八七年完成）のデザイン変更の経緯をイスラーム的倫理観をもつことを自らの主要なアイデンティティとする人々の視点からひもといていく。

冒頭で述べた「オスマン風モスク」とは、広義にはオスマン時代（一二九九～一九二二年）の様式を、鉄筋コンクリート造等の現代工法で再現したモスクであるが、そうしたモスクのほとんどはオスマン朝の最盛期を含む、古典期（二五〇～一七〇三年）の様式を用いている。従って現

実には、オスマン風モスクはオスマン時代の建築様式の中でもとくに古典期様式、具体的にはスレイマニエ・モスクやスルタン・アフメト・モスクのような中央大ドームに半ドームを添えるモスクの様式を採用し、現代工法を用いて建設されたモスクを指している。本稿で取り上げるコジヤテペモスクも、古典期オスマン様式を再現した、狭義のオスマン風モスクである。

（一）トルコにおけるモスクの様式議論

七世紀から現在に至る中東イスラーム建築史において、モスクの類型は三つに大別されて概観されることが一般的といえる。第一にムハンマドのモスクなど初期イスラーム時代から存在し、モスクの原型ともいえる多柱式、第二に

ペルシア文化圏に根を下ろした、四つのイーワーンを有するチャハル・イーワーン様式、そして第三にはオスマン朝古典期に確立された、中央大ドームに半ドームを添えるモスクの様式である。本稿のテーマと関連するのはこの第三の様式で、オスマン朝の都イスタンブルで創り出されたそのかたちは、ビザンツ時代に創建された教会堂アヤソフィアに端を発するものである。アヤソフィアによく似たモスクの存在は、キリスト教徒を内包するコスモポリタン、イスタンブルの社会を表象しているともいえるだろう。

ムスリムには日に五回の礼拝が義務付けられているが、その器であるモスクがどうあるべきかといった規定はそもそもコーランにもハディースにもない。モスクはどのような形態をとつても良いのである。とは言つてもその一方で、七世紀以降の長い時の流れの中で数多のモスクが建設され、事例と経験が集積されたことから、モスクらしさやシンボリズムが生まれてきていることもまた確かである。

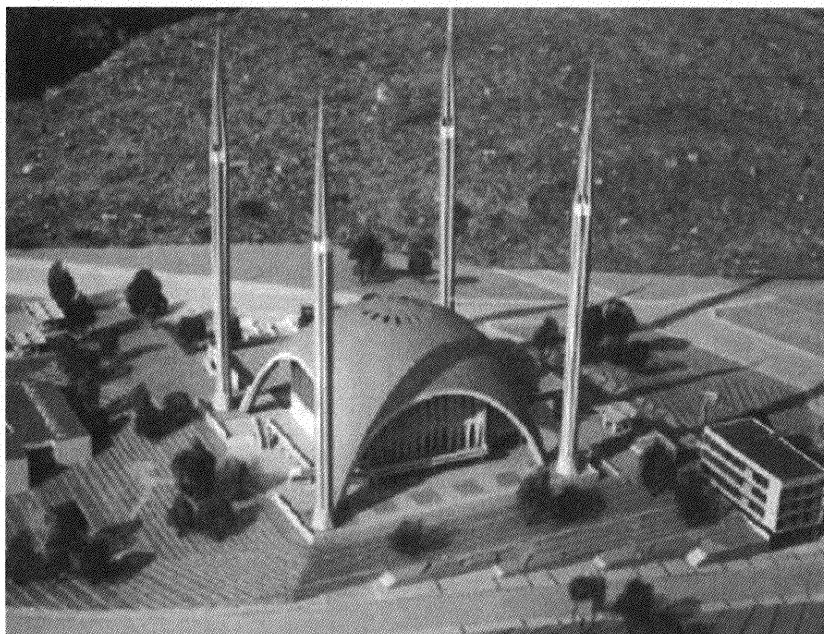
二〇世紀トルコの現代モスクに視線を移すと、オスマン古典期様式が今も重用されており、モダンなデザインの事例は極めて稀である。このようにオスマン風モスクが主流となっている現実の中で、モスクの様式議論は迷走を続けてきた。建築界の学者や建築家は、今生きるこの時代に固有の新しい造形美を創出したいと考えており、

学会ではこういった挑戦にコンセンサスを得られるもの、社会での様相はこれと無関係に展開している現実に長年、不満を感じている。トルコ社会でオスマン風モスクが増える要因のひとつに、モスクが信徒の自発的で限られた喜捨によつて建設されるので、その工事は経費軽減が可能な職人に依頼されることが多いという点にある（山下二〇〇八 八六二頁）。職人が建設することは違法だが、モスク自体が不法占拠等の違法建築であることも少なくないため、現実として頻繁に存在する解決方法であることは、次の調査結果からもうかがえる。宗務庁がトルコ北西部地震（一九九九年）の後、当時建設中だった全国のモスク一一七六件を対象に実施した調査報告によると、モスク一一七六件のうち八一％に建築許可がなく、五六％に建築設計図、六五％に構造計算書が無いことがわかった（Hurriyet 2004:713）。換言すれば、八一％がいわゆるゲジェコンドウ（一夜建て建築）と呼ばれる不法占拠建築であり、五六％が建築家によつて設計されておらず、六五％が構造建築家によつて構造計算が行われていないこととなる。この数値が示すとおり、トルコ北西部地震で最も多く倒壊した建物が現代モスクであった。このようにモスク建築の半分以上に建築家関わっていないという状況が、モスクの様式に関する学界での議論を現場に反映されにくく

し、信徒の好みを職人の手によってダイレクトに表現することにつながっているのである。この構造にメスを入れない限り、学者や建築家のフラストレーションは続いていく可能性が高いといえる。もちろん、建築家が手がけるモスクもあり、施主の意向を優先してオスマン風モスクをデザインする場合もありうるし、建築家が自らの獨創性を主張してモダンなデザインが適用されることも少数例ではあるが存在する。本稿で扱うコジャテペモスクの第二案の場合には前者で、建築家ヒュスレヴ・タイラは古典期様式を採用した³ことについて、「施主に求められたから」と振り返っている。これに対してコジャテペモスクの第一案や、ベフルズ・チニジによるトルコ大国民議会モスクは後者の好例で、建築家自身の歴史観がモスクのモダンなデザインに反映されたかたちとなっている〔Çiğci 1991: 71〕。しかしトルコにおいてトルコ大国民議会モスクのような事例は極めて稀である。また、コジャテペモスクの第一案に至っては、デザイン変更を強いられたという経緯もある。それではなぜ、トルコではこれほどまでにオスマン風のモスクが好まれるのであろうか。

筆者は、これに対するひとつの答えが、一九六〇年代半ばに起こったコジャテペモスクのデザイン変更の過程にあったと考えている。コジャテペモスク建設プロジェクト

では、第一案は建築家ダロカイによって、オスマン朝モスクの痕跡を残しつつも、最新のシェルシテムを用いることによってそれまでに無い斬新な形のドームをもつモスクが提案された〔図一〕。建設途中で変更された第二案は建築家タイラの設計で、オスマン古典期様式を鉄筋コンクリート造で再現するものであった〔図二〕。コジャテペモスクに起こった、斬新なデザインから伝統的デザインへの変更は、新聞紙面をにぎわす一方で、学界においてはトルコの近代国家像を汚していると極めて厳しく批判された。にも関わらず、その後、オスマン風モスクは益々好まれるようになっていく。これは、コジャテペモスクのデザイン変更の過程を見守っていた敬虔な人々の心象形成になんらかの影響が及ぼされたためではなからうか。学界が批判しても一向に改善されない頑なさの根底には、その心象形成の過程に何らかの要因があるのではないかと推測される。そのため筆者は、コジャテペモスクのデザイン変更の過程をイスラーム保守層の視点から精査し、この心象形成という一面をひもときたいと思う。



図一 コジャテペモスク第一案の模型（建築家ダロカイ）



図二 コジャテペモスク第二案（建築家タイラ）

二、先行研究

まず、コジヤテペモスクのデザイン変更の理由について、先行研究ではどのように論じられてきたのかを整理してみたい。学界は概して、伝統的デザインへの回帰を、未来ではなく過去に目を向ける行為として批判的立場をとってきた。

（一）先行研究の論点

コジヤテペモスクのデザイン変更の経緯について、ダロカイの証言も含めて当時の様子を最も詳細に伝えているのは、建築雑誌『ヤブ』に掲載されたハソルの小論である〔Hasol 1987 25-26〕。ハソルによれば、コジヤテペモスクのデザイン変更の引き金になった出来事は、デミレル率いる保守系の公正党政権の成立に伴うモスク建設・維持協会執行部メンバーの交代であった。そしてそれを後押しした状況として、デミレル政権がまさに成立したその頃に、構造実験のためにモスク建設工事が一時中断していたことを指摘している。

一九六五年一〇月に公正党政権が成立すると、モスク建設・維持協会の委員構成が一新され、新政権側の人たちが新しく委員として入りこむとともに、彼らはコジヤテペモ

スクを首都アンカラ最大の規模にするようにと命じたところには指摘している。これについては建築家ダロカイも同様のことを次のように述べている。

「デミレルが政権につくと、委員交代がなされた建設・維持協会の執行部からの圧力が始まりました。まずはモスクをアンカラ最大とすべく拡張が求められました。私はこれに反対しました。アタテュルク廟に向きあうよう「な場所」にこのような建築を建てることについて、建築的問題とともに別の問題について理解を求めましたが、彼らはしつこく主張し続けました。」

〔Hasol 1987 25〕

ここでダロカイが述べている「別の問題」というのは、アンカラが宗教色を払しょくしたトルコ共和国の首都であることに関係している。トルコ建国の父ムスタファ・ケマル初代大統領は首都をイスタンブルからアンカラに移し、特に省庁や学校建築等を西洋の建築様式で建設させ、それをトルコ共和国近代化の象徴と位置付けた。そのためには中欧からブルーノ・タウトはじめとする複数の建築家を招へいするほどの熱の入れようだった〔Bozdoğan 2001 56-105〕。アンカラの都市形成にこういった経緯があるために、この街にオスマン朝首都イスタンブルに似せてオスマン風モスクを建設するということは、こうした建国時

の精神に反するものではないか、というのがダロカイの意見であり、彼はそれを進言したが聞き入れられなかったと言っているのである [Husj 1976 69-70]。

ダロカイ設計のモスク「図一」は、一辺五〇メートルの方形上にシェルシステムによるドームが架構されたもので、二七〇〇〇平方メートルの敷地に四〇〇〇平方メートル(約四〇〇〇人規模)の礼拝室を予定していた。これに対して、建設し直されたモスク「図二」は二七〇〇〇平方メートルの全敷地に約二万人規模のモスクと付属の市場や駐車場等が配置される文字通り大規模なものとなった。

建設途中でのこのような大きな規模変更は、普通は避けられるものである。デミレル政権が成立したのは一九六五年一〇月二七日のことだが、前年の一九六四年には既にコジャテペモスクに隣接した宗務庁舎部分は完成、モスク部分も基礎は完成し、ドームを立ち上げるばかりの状態である。ドームの構造実験の終了を待っていた。モスクの基礎構造は、その上に建ち上がる建築の規模に合わせてつくられるのであるから、建設途中でモスクの規模を拡大することとはつまり、完成している基礎を取り壊して打ち直すことを意味する。当然のことながら、資金的・時間的にも多大なエネルギーを要するため、普通の常識では考えられることではないが、それがあえて求められた背景には、それ

まで宗教色が排除された街づくりが行われてきた首都アンカラに、誰の目にも飛び込んでくるような大規模モスクをつくるという方向転換を意味していたといえるだろう。それは一九六〇年の軍事クーデターが断ち切ったはずの「脱イスラーム政策の緩和」を、デミレル政権がなぎとどめようとしていたことを示唆していたともいえるだろう。

(二) 規模の変更からデザインの変更へ

ダロカイとの建設契約が破棄された後、コジャテペモスク建設・維持協会は、今度はヒュスレヴ・タイラとファアティン・ウルエンギンという二人の建築家に「スルタンアフメト「モスク」とスュレイマニエ「モスク」を足して二で割ったような、伝統的なモスク」を直接発注したとハソルは述べている [Hasol 1987 25-26]。タイラは筆者によるインタビューの中で、「直接発注ではなくコンペだった」と証言しており多少の食い違いは否めないが、求められたモスクの様式については両者の意見が一致している。つまり、建設・維持協会は、メンバー交代したばかりの一九六五年末にはモスクの大規模化を求めていたわけであるが、ダロカイとの建設契約破棄後、設計段階に入ると、モスクの様式をオスマン風と指定してきたことになる。その選択はどのように芽生えたのだろうか。

ハソルは小論の中でこの点を明確にする代わりに、一九八六年、オザル首相がコジャテペモスク開堂式を選挙の数日前に行つて大勝したことに言及している。そしてモスクの前で手を振るオザル首相の姿を映した写真の新聞一面掲載は、保守層の支持獲得につながつたというエピソードを紹介することで、オザル首相がしたたかに宗教建築を政治に利用する様子を伝えている〔Terciman 1987: 8, 29〕。まるで一九六〇年代のデザイン変更の目的は、政治家がこういうことをしたからだと言わんばかりである。

しかしこの点はさらなる精査を要する。確かにオザル首相の行動は、選挙民に自らの宗教心をアピールするため、オスマン風モスクを利用するものであつたのだろうが、二〇年前のデミレル政権成立時にはモスクのかたちまで限定されていたわけではない。もし宗教建築の政治利用にふさわしい形がオスマン風であると当時から意識されていたのであれば、建設・維持協会の委員交代が行われた時点でデザイン変更が話題になつたはずである。しかしそうではなかつたことは、ハソルだけでなく当事者であるダロカイ自身が明らかにしているとある。

なぜこのモスクの斬新なデザインが拒絶されたのか。この点は現代トルコにオスマン風モスクがあふれる現象を検証する上でも非常に重要な点である。加えてその変更理由

が曖昧にされたままでは、この出来事が何に對する不満・抗議だつたのか、正しく理解することは不可能であり、その後のトルコ共和国におけるモスク建築のデザイン評論を行う上でも、間違つた結論に導かれかねないのである。

そしてもうひとつ、この問題についての先行研究の傾向を述べるならば、モスクという建物をより身近に感じていくのは、宗教関係者や信徒の直接的な主張を取り上げるものがないということである。ハソルは小論でイスラーム保守層の言い分に触れてはいるが、あくまでも建築界のオピニオンリーダーであるハソルの目を通した保守層像ではない。しかも不正確な情報に基づいた主張があることも否めない。例えばハソルは、保守系新聞テルジュマン紙が「コジャテペモスクに対し、「モスクのミナレットがミサイルに似ている」とそのデザインを批判した」と述べているが〔Hasol 1987: 25〕、筆者が当時のテルジュマン紙の紙面を精査しても、こういった表現は見つからなかつた。当時、口頭でこういった批判があつたのかもしれないし、又は内輪で議論するうちに誤解が生じてしまつたのかも知れないが、紙面で実際にどのような批判が展開されていたのかを再度、検証する必要があるだろう。

(三) 本研究の目的と方法

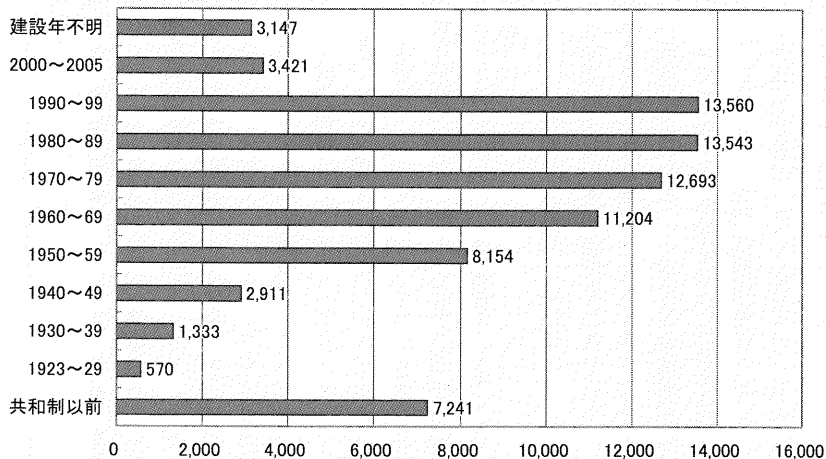
そこで本稿では、なぜコジャテペモスクの斬新なデザインが変更されたのかを、これまでの先行研究では素材とされてこなかった、イスラーム保守系新聞テルジュマン紙の報道経緯を追うことで明らかにすることを試みる。先行研究ではテルジュマン紙の主張が断片的に、そして実際の報道とは異なる言葉で語られてきており、そこに何らかの誤解がある可能性もある。テルジュマン紙を精査することで、イスラーム保守層の主張が明確になり、さらにはなぜ建築家ダロカイによる斬新なデザインが受け入れられなかったのかにより明瞭になることが期待される。

三、コジャテペモスクの沿革

(一) 建設経緯

コジャテペモスクの建設は、一九四四年一月八日、当時の宗務局長官アフメト・ハムディ・アクセキが任意団体「アンカラのイェニシエヒルにモスクを建設する会」を設立したことに始まる(Diyaset n.d. 5)。五〇メートル圏内に複数のモスクがある場合、ひとつを残してその他を閉鎖することを定めた法律第二八四五号（一九三五年施行）がまだあった時代で、全国的にモスク建設は抑制されて

史苑（第七〇巻第二号）



図三 トルコ全国におけるモスク建設数の推移（2005.12.31 時点）

現代トルコにおけるコジヤテペモスクのデザイン変更(山下)

いた〔Schimmel 1969: 83-84〕〔図三〕。また一九四四年は、共和人民党の単独政党制から、複数政党制に移る前年であり、共和人民党による脱イスラーム政策が見直されることになるメンデレス政権期(一九五〇〜六〇年)誕生まであと六年という時でもあった。そのため実際のモスク建設への歩みはゆっくりしたもので、一九四七年、同会は建設予定地も定まらぬままモスク設計コンペを行うが、第一等なしと結論付け、具体的な進展には至らなかった。

しかし一九五五年、メンデレス首相が脱イスラーム政策の緩和のひとつとして、モスク数を制限する法律第二八四五号を撤廃、翌一九五六年にはアンカラ中心部のイェニシエヒルにモスク建設予定地を確保すると、モスク建設実現へと一気に勢いづくのである。一九五七年にはモスクとともに宗務庁庁舎の建設が盛り込まれ、「アンカラのイェニシエヒルにモスクを建設する会」は、「トルコ宗務庁サイト建設・維持協会」(以下、建設・維持協会と表記)と名称変更し、新たな体制で二回目の建築設計コンペを行った。審査委員会はいずれの応募作品も完全ではないとしながらも、ヴェダト・ダロカイとネジャヤティ・テケリオウルの共同作品を実施可能と判断した。ダロカイらの設計案では、四〇〇〇人規模のモスクの他、宗務庁庁舎、高等イスラーム・インスティテュート、会議場、博物館、

二〇〇台収容の駐車場、観光用バザール、生活困窮者のための無料食堂、診療所が予定されていた。

このときの審査委員会は、メンデレス首相を名誉審査委員長とし、以下の一五人の委員で構成されていた。それらは、内閣府事務次官アフメト・サーリフ・コルル、アンカラ県知事、アンカラ市長、イスタンブルとアンカラから開発局長、エミン・オナト・イスタンブル工科大学教授、ケマル・アフメト・アル同大教授、ハミト・ケマリ・ソイレメズオウル同大教授、メフメト・アリ・ハンダン芸術アカデミー教授、セファ教授、オルハン・アルサチ・イスタンブル工大准教授、ハヤーティ・タバナルオウル博士・建築家、宗務庁長官、ヴェフビー・コチ(コチ財閥の創業者)、ユゼイル・アヴンドウク(銀行家)であった〔Tercüman 1967: 9, 291〕。

一九六〇年、軍事クーデターが発生し、メンデレスを党首とする与党民主党が憲法違反をしたとしてトルコは一時的に軍政下に置かれるが、一九六一年一〇月には総選挙が行われ、民政に戻される。一連の社会情勢を受けてコジヤテペモスクの建設工事開始までには若干時間がかかったが、一九六三年六月一二日、宗務庁長官ハサン・ヒュスニユ・エルデムが起工を宣言、早くも翌年の一九六四年には、宗務庁の庁舎部分の建設が終了、加えてモスクの基礎工事

が完了、シェルドームの建設に入るばかりの状態となった [Diyanet n.d. 7]。シェルドームは当時、世界の建築界にとって最新技術であり、その実現には模型による構造実験が欠かせなかった。しかし費用と時間のかかるものである上、依頼先の構造家の突然の死という不運も重なり、ドロカイは期限までにドームの構造設計図を準備することができなかった。

この後、テルジュマン紙によれば、一九六六年にはドロカイとのモスク建設契約は破棄され、一九六七年八月にはモスクの基礎部分がダイナマイトで爆破されるに至る [Tercüman 1967:85]。その二ヶ月後の一九六七年一月三〇日には、ヒュスレヴ・タイラとフアーティン・ウルエンギンの設計によるモスクが着工した [Tercüman 1967:103]。そして約二年たった一九六九年一月二九日にはモスクの躯体工事が終了し、モスク一階が一時的に礼拝に公開された [Diyanet n.d. 10]。この後、未完成部分の工事が進められ、一九八一年にモスクの躯体工事は終了した。しかしその時点で、中庭、会議場、駐車場、店舗、管理事務所、図書館、遺体洗浄所といった付属施設部分は未完成だった。さらには同年三月一五日、建設・維持協会は、資金難に直面した。そのため同協会は膨らんだ借金とともに全資産を「宗務ワークフ」に移譲し、残されていた中

庭や会議場部分の工事や、モスク内装は宗務ワークフが行った。こうして二〇年の歳月を経て、コジャテペモスクは一九八七年に完成する。

本稿で注目するのは、一九六四年のモスク基礎完成から、一九六六年に建設契約破棄に至る間に何があったのかということである。次章ではこれについてテルジュマン紙の報道経緯を見ていくが、その前にコジャテペモスク建設プロジェクトの位置づけを整理し、確認しておきたいと思う。

(二) 国家的規模のプロジェクト

コジャテペモスク建設プロジェクトは、街中で一般市民の手によつて建設されるモスクと比べれば、政治家や政府高官の関与がとりわけ目立つといえる。例えば、一九四四年、当時の宗務局長官アクセキが任意団体「アンカラのイエニシエヒルにモスクを建設する会」の代表を務めており、ドロカイ案の着工式にも、デザイン変更後のタイラ案の着工式にも宗務長官が参加している。用地確保にはメンデレス首相が動いており、加えて確保された二七〇〇〇平方メートルという用地の大きさからも、大プロジェクトが想定されていたと考えられる。またデミレル政権設立にもなつて、建設・維持協会委員の交代があったことも、政治家達と近いところにあったプロジェクトであったことを

示唆している。

建設費用の出所は公表されていないが、少なくとも一九六四年に完成した庁舎部分の建設費は公費であると推測される。その他の部分については、部分的には政府からの補助金があったと考えられるが、建設工事がこれほどまで延びたことを考えると、政治家や政府高官の関与が目立つ割には、一般モスクと同様にかんりの部分が信徒の喜捨で賄われていた可能性が高い。しかし費用負担がどうであれ、メンデレス首相がモスク数を制限する法律を撤廃し、敷地の確保をしたことに支えられたこのプロジェクトは、共和国建国以来のイスラーム色排除の流れを変える、ターニングポイントといえる出来事だったといえるだろう。

四、テルジュマン紙による報道の経緯

それではここでいよいよ一九六四年のモスク基礎完成後、一九六六年のダロカイとの建設契約破棄がどのような経緯を経て進んでいったのかを具体的に見ていこう。モスクの基礎は一九六四年に完成していたが、実際に具体的な動きがでてくるのは、一九六六年に入ってからであった。

(一)ダロカイ報道の発端

テルジュマン紙は、一九六六年一月一九日付一面の見出し記事と二面のコラムの中で初めてダロカイについての報道を行った。記事の内容は、一九六六年一月一七日に行われた、建築家・技術者協会のアンカラ支部総会でのダロカイの軽々しい発言への批判だった。その発言はコジャヤテペモスクとは関係のない、アヤソフィアに関するものだった。具体的な内容を示す前に、まずは話題の中心とされているアヤソフィアについて触れておきたいと思う。

現存するアヤソフィアは、ビザンツ帝国下の六世紀に完成した教会堂であるが、一四五三年のコンスタンティノポリス陥落を機にモスクに改修された。ビザンツ時代にはコンスタンティノポリス総主教座が置かれるなど、東方正教会の中心的存在として、キリスト教徒に祈りの空間を提供してきた。その後のオスマン時代には帝都における大モスクのひとつとして今度は、ムスリムに祈りの空間を提供してきた。二〇世紀に入り、トルコ共和国下の一九三五年、五〇〇メートル圏内に存在するモスクをひとつに制限する法律が施行されると、アヤソフィアは近隣にスルタン・アフメト・モスクがあるため余剰モスクと判断され、博物館へと変えられた。当時、博物館的価値のない余剰モスクは、倉庫に転用されていた。やがてメンデレス政権

下の一九五五年に同法は廃止され、アヤソフィア以外の多くのモスクがイスラームの礼拝所へと戻されたが、アヤソフィアは対外的な配慮もあって、博物館のまま残された。一九六〇年、メンデレス政権が軍事クーデターで倒されると、アヤソフィアのモスク化実現の望みは断たれ、保守層の一部に不満がくすぶり続けることになる。

この後に紹介する、一九六六年一月一七日のダロカイの問題発言が取りざたされる約二ヶ月前、すなわち一九六五年一〇月二七日、メンデレス元首相の民主党の流れをくむ、公正党、デミレル政権が誕生した。すると、イスラーム保守層は水を得た魚のようにアヤソフィアのモスク化を主張し始めたのである。そのオピニオンリーダーとなったメディアがテルジュマン紙であり、同紙は一九六五年一〇月三一日のコラムでいち早くアヤソフィア問題を読者に思い起こさせ、今度こそ解決をと訴えている [Tercüman 1965.10.31]。その後、この話題は、約一ヶ月のあいだをおいて、十一月二四日以降、年明けまで頻繁に取り上げられる。次に示すダロカイの発言は、このようにアヤソフィア報道が過熱する中、アンカラで行われた建築家・技術者協会総会で発せられたもので、一九六六年一月一九日にテルジュマン紙上で始まる、一連のダロカイ報道の発端となった。

次の記事、「アンカラにいるギリシア人」がそれである。冒頭でダロカイの発言を引用した上で、それに対する批判が展開されている。

一九六六年一月一九日付一面 [Tercüman 1966.1.19 a1]
『アヤソフィアをモスクにするという問題は、海外世論にとつて重要な問題です。例えばそれはセリミエ「モスク」に「教会」の鐘をつけるくらいの大事件なのです。アタテュルクの築いた「博物館という」ステイタスを維持しようではありませんか。アヤソフィアはトルコ人のもではなく、全世界のものなのです。アヤソフィアを教会にして、その中にキリスト教の聖職者を置き、この建築をモスクにしたいという人々を「そこへ」連れて行き、懺悔させるべきだと「私は」思います。』
身の毛がよだつようなこの恩知らずな演説を聞いた後に、建築家かエンジニアかは知らないが、この会員がトルコ人であると信じることは極めて困難です。アヤソフィアのために、ヴェニゼロスからマカリオスに到る全てのギリシア人の通訳となったヴェダト・ダロカイは、自分が何をしているか分からないまま、さらにはアヤソフィアをモスクにしたい人々を連れてゆき懺悔をさせるべきだ・・・と言っているのです。

現代トルコにおけるコジャテペモスクのデザイン変更(山下)

つまり三千万人のムスリムをキリスト教へと誘っている、いや誘っているのではない。一種の強引な欲望なのです。

セリミエ「モスク」に鐘が付けられるようなことを、神が、トルコ人とイスラーム世界にお見せになりませぬように。しかしながら、頭から爪の先まで無学なこの紳士にお教えしましょう。スペインだけで六〇〇ほどのイスラーム礼拝所の壁や柱に、キリスト教の殉教者のレリーフが施されました。我々はヨーロッパで教会堂に転用された六〇〇ものモスクについて説明を求めているではありません。それからモスクの歴史的な定命は教会堂になることだったのでしよう。それはちやうどアヤソフィアの定命がモスクになることであつたように。アヤソフィアもセリミエ「モスク」も、ダビデが理解していたような石の塊ではないのです。我ら国民の希望、悲しみ、喜び、勇気、苦しみ、信仰が、そこで語られ始めたのです。アヤソフィアには血を流して征服した、我々の権利があります。これら全てを理解するためにはトルコ人となり、ムスリムとなる必要があります。これに反する主張をするのは、マカリオス(1)が洗礼した、ろくでなしだけです。」

さらに同日二面のコラムでも、コラムニストのアフメト・カバクルがダロカイのアヤソフィア発言をめぐって持論を展開している〔Tercüman 1966.1.19 b〕。カバクルは、約一ヶ月前にトルコ国営放送局が「アヤソフィアをアタテュルクが与えたステイタスを保って生かしていくことと、この件をこのように世間に知らしめていくとの決定がなされた」と報道したことに触れ、その決定を下したのが建築家・技術者協会アンカラ支部のダロカイであつたことを冒頭に述べて、コラムを始めている。そしてアヤソフィアの歴史について述べた後、ダロカイのアヤソフィアに関する問題発言についての反論を述べている。このコラム中、コジャテペモスクとの関連について触れたところが一文だけあるのでそこを抜きだすと、次のとおりである。

「ヴェダト・ダロカイという人物については、彼が数年前、アンカラに予定された『革命宗務庁サイト』プロジェクトをひどいかたちで実施した挙句、信徒たちの喜捨から集められた何十万リラをもポケットに入れたと聞いたことがある」

これら初日の報道論点をまとめると、コジャテペモスクの批判は一点のみ、コラムの中で「革命宗務庁サイト・プロジェクト」というプロジェクト全体を指す言い方で批判されているが、具体的に何が悪かったのかは述べら

れていない。むしろ信徒の喜捨を「ポケットに入れた」と述べ、着服したかのような印象を与える曖昧な表現でダロカイの人間性を攻撃しているように見える。コジヤテペモスクに関連する言及は、一九日付記事三本の中でこの一文のみであり、アヤソフィア発言への反論が主であった、と言つてよいであろう。さらに翌日には民族主義や宗教心を軸に活動する若者から集めたコメントが報道されているが、ここではコジヤテペモスクの件は全く語られていない。批判の論点がより明確になるので、これらを次に紹介する。

一九六六年一月二〇日 [Terciman 1966:1.20]

ラスイム・ジニスリ氏 愛国的トルコ人学生協会代表^⑫

「この発言はせいぜい、国賊か狂人が言ったものである。アヤソフィアを教会にして聖職者を置くべきで、モスクにしようと言う人達をそこで懺悔させると発言し、身分証明証にはトルコ人・ムスリムと書かれているその人物は、狂人であるはずだ。アヤソフィアはトルコ人のものではなく世界のものだと主張するこの狂人は、国民的良心に狂気をきたすほど、トルコ性と歴史に関する思慮に欠けている。このような思想の未熟な妄想を、若い世代として強く抗議する。」

ネデイム・ウール氏 高等イスラーム・インスティテュート学生協会代表

「ムスリム・トルコ人のものであるキプロスが奪われようとしているときに、思慮分別を持ち合わせず、魂のこもらない、良識に欠ける建築家の『アヤソフィアをモスクにすることは、セリミエ「モスク」に「教会堂の」鐘をつけるようなものである』という発言は、幸運な過去を汚す、行き過ぎた表現です。もしこの建築家が鐘の音をそれほど称賛するのなら、ギリシアの聖職者のもとへ行き、教会の使用人となつたらよいのです」
トウンジャイ・テレキリ氏 イスタンブル工業学校電氣学科の学生協会代表

「我が国民の発展には、倫理的で意識の高い若年層が必要です。若者として我々は、国家的・宗教的問題に敏感でなければならぬと信じています。アヤソフィア問題について不用意な発言をし、建築家であるという人物を医者に診せるべきですし、その人物を鐘男にすべきです。その鐘は夢の中だけでしか見ることはできませんが、これはなんと大胆不敵、なんとという侮辱でしょうか。トルコ人の、ムスリムの国において……」
これら紙面で意見を述べている人物は、高等教育機関の学生協会の代表を務める若者たちと、それら学生協会をと

りまとめていた愛国的トルコ人学生協会の代表ジニスリである。愛国的トルコ人学生協会の主張は、時代によって違があるが、ジニスリが代表を務めた一九六五年以降は、民族主義と宗教心を軸に活動を行っていた¹⁴。このことは、発言の中で「ムスリム・トルコ人」または「トルコ人ムスリム」という表現が繰り返し出てくることにも表れている。若者達はダロカイの発言がムスリムというアイデンティティーにも、そしてトルコ人というアイデンティティーにもそぐわない、従って非国民であると異口同音に述べている。さらには、ウールが、「ムスリム・トルコ人のものであるキプロスが奪われようとしているときに」と発言の冒頭で述べているとおり、一九六五年の一月から二月にかけて、キプロスとの小競り合いが続いており、連日、新聞報道がなされていた。これらの学生協会は、「キプロスに国旗が必要となるのなら、それはトルコ国旗である」、または「手を伸ばすのではない、キプロスはトルコ人のものだ」と声を上げ、デモ集会を起こしていた。抗議の矛先は隣国のギリシアであったことは言うまでもない。そのような時に発せられたダロカイ発言は、ムスリムではなくキリスト教徒の言い分を代弁するものであると同時に、トルコではなくギリシアを擁護するものと理解されたといえる。同じ紙面ではまた、オスマン朝末期の民族解放戦争時

にギリシアに占領されていたイズミルの関係者の見解が次のとおり紹介されている [Tercüman 1966:1.20]。

オスマン・キバル氏 イズミル市長

「近頃、とくにアンカラでは熱気が落ち込んでいます。冷やかな印象とでも言いましょうか。しかしともかく、この人物はショック状態で話をしたのでしようが、ショック状態で発言したとしても、絶対的存在のファーティフ「メフメト二世」とアタテュルクの高徳な魂に傷みを感じさせました。¹⁵」

メフメト・カラオウル氏 公正党イズミル県連代表

「アヤソフィアはモスクにされるべきです。その建築家についてですが、おそらくこの男はトルコ人ではないはず。トルコ人であり、かつムスリムである人物でこのような発言をする人はいません。この人物をムスリムとみなすことは出来ないと、私は思います。」¹⁶

ジェラル・ユルドウルム氏 イズミル県ムフティー

「ひとりのムスリムとして、私はアヤソフィアがモスクになることを望みます。建築家が発した言葉は、彼のムスリムとしての関心の度合を示しています。彼はイスラームに関心がないのです。布教者のようにキリスト教のプロパガンダをしているのです。」

アリ・ルザー・ギユヴェン氏 イマーム・ハティープ神

学部学生養成協会代表

「我々に託されたこの建築は、イスタンブールの征服時にモスクに変えられたのです。アヤソフィアはモスクであるべきなのです。」

このようにテルジュマン紙は、ギリシアによる占領経験のあるイズミルで、政治家と宗務官の意見を報道している。前述の若者達と同様にトルコ人として、またムスリムとして、ダロカイ発言が不適切であることを訴えている。アヤソフィアをモスクへ戻そうと考える人々の根拠は、それがメフメト二世の得た戦利品であり、ワクフ財として寄進されて後世に遺されたものであるからで、イスラーム法では一度設定されたワクフ目的は永遠に変更なく実行されなければならぬ。したがってアヤソフィアがモスク以外の用途で使われることはイスラーム法違反だと主張しているのである。しかしトルコ共和国の法律はすでに西洋に倣って近代化されている。従ってこれが議論されている二〇世紀の法に照らし合わせれば法的根拠はないともいえるだろう。

これらの新聞記事内容から分かるように、ダロカイ批判はコジヤテペモスクとは全く関係のない、アヤソフィアの処遇に関する意見の対立から始まったのであった。それではこの報道がどのようにコジヤテペモスクの批判に結びつ

いていったのであろうか。

(二)ダロカイ報道のゆくえ

ここでは、ダロカイのアヤソフィア発言に対する批判報道の中で、コジヤテペモスクの建築家であることに言及されている箇所注目したい。

まず、前述したとおりコラムニストのカバクルは、一九六六年一月一九日付記事で、ダロカイが信徒の喜捨を「ポケットに入れた」と書いた [Tercüman 1966.1.19 b]。これがテルジュマン紙による、コジヤテペモスクについての初めて言及箇所である。その後ダロカイは、三月一七日付テルジュマン紙に掲載された自らの投稿声明文の中で、次のように抗議の弁を述べている [Tercüman 1966.3.17]。

「トルコ革命・宗務庁サイト建設協会 [「ママ」] によって支払われた金の一クルシユさえも我々は無駄にしなかった、それどころか我々の作業を行うために、数千リラの借金をしていることをお知らせします。」

一〇日後の三月二八日、今度はカバクルが自らのコラム欄でこれに、こう反論した [Tercüman 1966.3.28]。

『革命宗務庁サイト計画 [「ママ」] の報酬として、ムスリム大衆から集められた数十万リラをポケットに入れた』という表現を誤解し、無駄にお怒りになられた

現代トルコにおけるコジャヤテペモスクのデザイン変更(山下)

と思います。こんなふうに潔白と否認をお示しになる必要はなかったのです。「ポケットに入れる」という表現は、あなたが理解したような意味ではありません。『あのサイトを建設するためにムスリム信徒からお金を集めたモスク建築家が、アヤソフイア問題についてはあるこれ弁解してムスリム大衆と反対の立場をとることはふさわしくない』と、私が言いたかったことは明らかではありませんか?」

ここでカバクルは、モスク建築家としての品位を問うている。ダロカイはモスク建築家にはふさわしくない、なぜならアヤソフイア問題をめぐってギリシアとキリスト教徒に有利な発言をし、トルコ人とムスリムを不利な立場に追い込んでいる、と訴えているのである。換言すれば、コジャテペモスクのデザインが斬新であったことが問題なのではなく、そのデザインがダロカイという不信心者によって設計されていたことが問題だったといえるのではないだろうか。

さらに一ヶ月ほど過ぎた五月三日には、五月一日に建設維持協会から執行部に決定権が委任され、来たる金曜日の執行部会でダロカイの解任が検討される予定であることが報道されている〔Tercuman 1966:5:3〕。五月一日に行われた建設・維持協会の総会では、当事者から意見聴取が行わ

れ、可能な限り早急に契約解除をするべく、状況調査を行うと結論付けられている。この記事の中でダロカイの解任理由については、建設・維持協会の関係者二名の次の発言が報道されている。

一九六六年五月三日〔Tercuman 1966:5:3〕

宗務庁サイト建設・維持協会事務局長 メフメト・デリ
ヴェリオウル氏

「私はダロカイを以前にも抗議したことがあります。アテネでヘイソスフオモスの像が建てられ、そしてその下にトルコ人敵視の碑文がほられたり、サロニカにあるハムザ・ベイ・モスクが酒場建築に変えられたりという時に、アヤソフイアのモスク化に反対する者達が賛同を得ることは不可能です。」

宗務庁サイト建設・維持協会の副会長、ナジ・クナジュ
オウル准教授(アンカラ経済・商学アカデミー)⁽¹⁾

「ダロカイの考えをいかなるトルコ人も、ムスリムも支持しません。実際、彼の発言はまっとうな反発を食らいました。ダロカイは、この問題を建築学的観点から調査したと主張しています。今日、いかにローマ神殿が教会堂にされてきたか、また教会堂がモスクにされてきたかを考えれば、このような主張が不健全であることはすぐに分かります。さらにオスマン時代には

何世紀にもわたってアヤソフィアでイスラームの礼拝が行われてきたのです。つまり建築学的にも障害はないのです。」

これらはコジヤテペモスクの建設・維持協会の会長と副会長の、ダロカイ解任をめぐる発言であるが、いずれもアヤソフィア問題に言及して、コジヤテペモスクプロジェクトの形態的な批判はない。ダロカイのアヤソフィアに関する主張が、反トルコ、反イスラームであることを訴え、このような不信心な非国民はモスクの建築家としてふさわしくない、だからコジヤテペモスクの建築家の任から外すのだという結論に至りつつある。この後に行われたとされる金曜日の執行部会に関する新聞報道はなく、ダロカイがどの時点で正式に解雇されたのか、具体的な日付は不明である。しかし一九六六年五月頃に契約破棄されたと考えてまず間違いないだろう。

その後、テルジュマン紙におけるダロカイ関連報道は突然、なされなくなる。約一年の時間を経て、一九六七年六月二二日付記事「アヤソフィアのダロカイを告訴へ」では、「解約されたプロジェクト」という表現があるため、この時点でダロカイとの建築契約が正式に破棄されていたことは確実である。[Tercüman 1967.6.22]。同記事では、ダロカイが一〇年間で六一五〇〇〇リラを着服したとして、建

設・維持協会がダロカイ告訴を決定したと報道されている。これに対してダロカイは、解約された建築プロジェクトの費用として一二五〇〇〇リラをまだ受け取っていないとし、既に裁判所に訴えを起こしていることが報じられている。

また六月二二日付記事で注目に値するのは、ダロカイとのコジヤテペモスク建築契約破棄の理由が明確に書かれている点である [Tercüman 1967.6.22]。それらは、①欧米の車庫建築を真似たということ、②一〇年たっても完成させることが出来なかったこと、そして③アヤソフィアのモスク化に反対し、モスク建築にまったく似合わない精神と思想をもって行動する建築家であったという三点である。

コジヤテペモスクのデザインが車庫を真似たものだったという、具体的なデザイン批判が書かれたのはこの記事が初めてである。車庫のデザインを神聖なるモスクのデザインに転用するなどムスリムとして許し難い、ということなのである。

さらに一九六七年八月五日付記事「宗務サイトの基礎にダイナマイト」では、ダロカイ案モスクの基礎のダイナマイト爆破が始まったことを報じると同時に [Tercüman 1967.8.5]、「建設・維持協会筋は、ダロカイが米国フロリ

ダの車庫を真似たこと、その構造計算を依頼していたスペイン人構造建築家の死亡により、この問題を解決できなくなったと発表した」と述べている。

ただしダロカイ案のモスクがフロリダの車庫建築を真似たという件については、この後、一九六七年一〇月三日付の報道で実は酒場建築の転用だったと写真付きで報道されており、その真偽は定かではない [Tercuman 1967:103]。しかしながらここで重要なのは、コジヤテペモスクの具体的な形態批判が、明らかにダロカイとの建築契約が破棄された後に報道されたという点である。つまりダロカイはその斬新なデザインがテルジュマン紙上で批判されてコジヤテペモスクの建築家を解任されたのではなく、モスク建築家、ならびにトルコ人ムスリムとしての品位に欠けるために解任されたのである。

また一九六七年八月五日付記事「宗務サイトの基礎にダイナマイト」では、ダロカイが構造実験のために建設・維持協会から高額な費用を要求したり、あるいは構造実験を達成できなかったこと、そしてかつてのアヤソフィア失言問題にも触れつつ、この日のダイナマイト爆破に至ったことが次のように述べられている。

「ダロカイは、その日『コンペで採用された日』以降、建設・維持協会から何十万リラもの金を受け取った。

そして一九六五年には『ドーム実験』実施のため、同協会に詰め寄り始めた。ついにドーム実験は行われたが、ダロカイとその同僚たちは、この実験では不十分であると言い、ヨーロッパでのやり直しを求めた。関係者はダロカイのドームが技術的に不可能であると報告したのだった。

この間に、建築家がプロジェクトをフロリダにある車庫を真似て設計したことで、構造計算の実施については有名な『シエル構造専門家』のスペイン人に依頼したが、その教授が死亡したことによりこの問題を解決できなくなったことが、建設・維持協会によつて確認された。そして一〇年にわたる引き延ばし戦略をしたダロカイとの契約はすぐに破棄された。

一方、ダロカイが、アヤソフィアをイスラームの礼拝に公開しようとする人々に反対したこと、そして『アヤソフィアには鐘が取り付けられるべきで、その中に聖職者を置き、アヤソフィアのモスク化を望む者たちをここで懺悔させるべきだ』という主張は、建設・維持協会委員がダロカイとの全ての関係を断ち切る原因となった。」

この記事では、ダロカイがコジヤテペモスクプロジェクトから解雇された理由について、アヤソフィアに関するダ

ロカイの問題発言に加えて、コジャテペモスクのシェル・ドームの構造実験の行き詰まりと説明している。シェルドームの構造実験が予定どおり進まなかったことは、ダロカイも認めており、次のように述べている [Hasol 1987: 25]。

「契約を交わした後、プロジェクトの構造担当者がドームとなるシェルのテストを求めてきた。この実験が当時のトルコでは不可能と考え、最初、ネルヴィに相談をしたが、当人は実験は出来ない」と知らせてきた。これを受けて世界的に有名な構造家であるエドゥアルド・トロージャに話を持って行った。トロージャはこの実験を三千ドルで出来ると知らせてきた。しかししばらくしてトロージャは亡くなった。今度は当時、中東工科大学で教員だったブラジル人教授を信頼して、この実験を中東工科大学に任せた。残念なことにはしばらくしてそのブラジル人教授は中東工科大学を離職した。中東工科大学はこの状況では模型テストは出来ない」と知らせてきた。この状況は建設・維持協会にとって都合が良かった。我々のプロジェクトを實現不可能と主張して、一九六五年「ママ」に契約は破棄された。そして基礎はダイナマイトで爆破され、取り壊され始めた。これを受けてデミレル首相と会って見たが、デミレルの口から出た言葉は『これは私』の

力が及ぶ範囲」を超えている』だった。」

両者の意見は大筋で一致している。構造実験に多大な資金が必要とされたことも、施主側には大きな負担と不満になっていたと考えられる。当時の建設・維持協会にとつては、多大な費用と長い時間を費やしてまで、斬新なドーム建築にこだわる理由はこれといって無く、これにダロカイのアヤソフィアに関連する失言が加わり、ダロカイを擁護する理由もなくなつたのであろう。

これらの報道経緯をまとめると、何よりも先にダロカイのアヤソフィアに関する発言に対する批判があり（一九六六年一月一九日が最初）、そしてこれが原因でダロカイはコジャテペモスクの建築家を解任され（一九六六年五月頃、その後具体的なデザイン批判（一九六七年六月二二日が最初）に及んでいる。ハソルは、テルジュマン紙が、「モスクのミナレットがミサイルに似ている」と批判したと述べているが、そのような記述はテルジュマン紙上にはなく、実際には車庫や酒場建築が参考にされたという批判であった。車庫を参考にして神聖なモスクを設計する、または飲酒を禁じているイスラームの礼拝所を、酒場建築を参考にして計画することに対する批判は、ダロカイが本当にそういった建築を参考にしたかどうかの真偽は分からないとしても、テルジュマン紙の批判の矛先が常に、モス

ク建築家としてのムスリムの品位に向けられていたことが分かるのである。またハソルは、ダロカイのアヤソフィア発言の後、「テルジュマン紙がダロカイの人間性と「コジャテペモスク」プロジェクトに攻撃を始めた」と述べているが、そこには時間差を伴う順番があつたことが分かつてきた。両者は一緒に行われたわけではなく、まずはダロカイの人間性が攻撃され、次にコジャテペモスクの建築家の任を解かれ、その後プロジェクトの具体的なデザイン批判があつたのである。しかもそのデザイン批判は、デザインそのものに対する批判というよりは、建築家ダロカイがムスリムとして不適切な思想のもとに、車庫や酒場建築を参考にモスクをデザインしたというものであつたのである。

六、結びにかえて

本稿では、コジャテペモスクのデザイン変更の過程を、先行研究では素材とされてこなかった、保守系新聞テルジュマン紙の報道経緯を追うことにより、イスラーム保守層の視点から考察することを試みた。これによつて、コジャテペモスクのデザイン変更はシェルドームによる斬新なデザインのためになされたことではなく、建築家ダロカイの人間性、ならびにモスク建築家に求められるムスリム

としての品位に疑問が呈されたためになされたことが明らかになつた。このデザイン変更の過程をテルジュマン紙上で見守つていた信徒たちは、不信心な建築家の心無い言動とモダンなモスクデザインというふたつを結びつけていったといえる。こうした心象形成がその後建設されたモスクのデザインに少なからず影響を及ぼし、現代にまで続くオスマン風モスクの大量発生につながっているといえるだろう。

それにも関わらず学界では、オスマン風モスクが現在でもなお支持されている現状について、イスラームの再興を望む後進的な保守層の存在に焦点をあてて批判を繰り返している。本来、宗教心に無配慮なダロカイ発言の不適切性とその影響こそ客観的に分析されるべきだったが、学界では全く議論されてこなかった。この学界の姿勢は、オスマン風モスクを減らすどころか、さらに増やしてしまうことになつている。建築界が過去の様式を模倣した現代モスクをこれ以上、増やしたくないと本当に望むのであれば、信徒の宗教心に配慮しつつ、二一世紀の新たなデザインを一緒に創りあげていくことが重要となろう。

引用文献

山下 二〇〇八 「トルコ共和国のモスクをデザインにみられる課題」『日本建築学会計画系論文集』第七三巻「第六二六号」八五九～八六六頁。

Akgündüz Ahmed et al.

2006 *Kilseden Müzeve Ayasofya Camii* (in Turkish), Osmanlı Araştırmaları Vakfı Yayınları

Behruz Çiniçi

1991 “Ben Taksim eden bir Mimarım” (in Turkish) *Arredamento Dekorasyon* pp.66-71

Bozdoğan, Sibel

2001 *Modernism and Nation Building*, University of Washington Press,

Diyanet

n.d., *Ankara Kocatepe Camii 1967-1987* (in Turkish), Türkiye Diyanet Vakfı,

Tabla, Hüseyin

2009 “Kocatepe Camisi’ni Yapım ama Bu Hiçbirinin Kopyası Değil” Arkitera.com, <<http://www.arkitera.com/interview.php?action=displayInterview&ID=&year=2009&ID=170>> (参照 2009-09-18)

İhtiş, Selim & Topçuoğlu, Nazif

1976 “Kocatepe Camii Mümması” (in Turkish) *Mimarlık* 76/1

Schimmel, A.

1969 “Islam in Turkey”, Arberry, A. J. Ed., *Religion in the*

Middle East: Three Religions in Concord and Conflict, Vol.2

Tümer, Gürhan

1996 “Bir Cami Dosyası” (in Turkish), *Egeminarlık Sayı* 20

トルコ建築史

Hürriyet (in Turkish)

2004.07.13 “Mimar Sinan’in kenikleri sızıyor!” online, 2004-07-13, <<http://www.milliyet.com.tr/2004/07/13/guncel/azgun01.html>> (参照 2007-05-16)

Tercüman (in Turkish)

1965.10.31 “Ayasofya... Sembol” p.2, Ahmet Kabaklı 2469
トルコ記事。

1966.1.19 a “Ankara’da bir Ainalı” Baş Yazı p.1

1966.1.19 b “Beyinlerde Öten Çan” p.2, Ahmet Kabaklı 2469
トルコ記事。

1966.1.20 “Ayasofya, Türkün ve Müslümanlarıdır” pp.1,7,

1966.3.17 “Ayasofya Niçin Müze?” p.2

1966.3.28 “Ayasofya’ya Dönüş” p.2

1966.5.3 “Dalokay Diyanet Sitesi Mimarlığından alınıyor” pp.1,7,

1967.6.22 “Ayasofyacı Dalokay mahkemeye veriliyor” pp.1,7,

1967.8.5 “Gara’ji-Cami yerine 100 bin duayı Allaha ulaştıracak Cami yapılıyor” pp.1,7

1967.9.29 “Modern Kocatepe Camii Dinamitle Yıkıldı” pp.1,7,

現代トルコにおけるコジヤテペモスクのデザイン変更(山下)

- 1967.10.3 "Dalokay, meyhaneye 4 direk dikip cani yapmış"
pp.1,7,
1967.10.31 "Diyaneî Sitesinin temeli tekdîr sesleri ile din
atıldı" p.1
1987.8.29 Referandum 8 gün kala durum Meydanlar
"MAVİ" p.1

図版出典

- 図一 Tayla 2009
図二 筆者撮影
図三 宗務庁公表の統計データをもとに筆者が作成

注

- (1) オスマン建築は、その様式により六期に分けられる。初期一八九〇〜一五〇〇年、古典期一五〇一〜一七〇三年、チューリップ期一七〇三〜一七三〇年、トルコ・バロック期一七三〇〜一八〇八年、コスモポリタン期一八〇八〜一九〇八年、ネオ・オスマン期一九〇八〜一九二二年
(2) この様式はその表面にバロックやロココといった西洋風の装飾をまとい、オスマン古典期以後の新たな展開の基盤ともなった。
(3) 筆者によるインタビュー。(二〇〇六年八月三〇日、於タ
イラ宅)
(4) トルコ大国民議会モスクの形態は、歴史的モスクの形態をダイレクトに再現することなく、チニジ自身による歴史
的モスクの形態に関する分析と解釈から導かれている。コ

ンクリートやガラスを駆使した独創的な空間が評価され、一九九五年、イスラーム建築アガハーン賞を受賞した。

- (5) ダロカイ設計のコジヤテペモスクの規模について、ハ
ンルは四〇〇〇人規模と述べる一方、宗務庁発行の [Diyaneî
n.d.:6] では、二〇〇〇人規模と述べられている。
(6) オルハン・サファ・イスタンブル工科大学教授のことか？
(7) ハヤティ・タバナルオウルは、アンカラのチャンカヤ・
メルケズ・モスク(一九六一年築)の建築家。
(8) 一九六七年九月二九日付テルジュマン紙、一面及び七面。
建築家ダロカイの投書に掲載した部分を参照。

- (9) 建設・維持協会の資産を受け継いだ宗務ワックフでコジヤ
テペモスクの建設に関する史料を探したところ、当時の建
設・維持協会のメンバーであり、現在、宗教・社会事業ワ
ックフの理事を務めるアフメト・ウズンオウル氏の個人管理下
にあることが判明した。史料は公刊が予定されており、内
容の確認は残念ながら出来なかった。

- (10) オスマン朝下のアヤソフィアについては、[Akgündüz
2006] が詳しい。

- (11) マカリオスは、キプロスのギリシア正教の大司教であり、
政治家。一九五九年キプロス独立後は初代大統領に就任し
た人物。

- (12) 愛国的トルコ人学生協会の第四七代表を務めたジニス
リは当時、イスタンブル大学法学部の学生だった。

- (13) イスタンブルにある現在のウルドゥズ工科大学の前身。
(14) 愛国的トルコ人学生協会のウェブサイトで、同協会
の歴史が説明されている。 <[http://www.mtb.org.tr/sayfa.
asp?id=1](http://www.mtb.org.tr/sayfa.asp?id=1)> (参照 2009-09-18)

(15) メフメト二世はコンスタンティノポリス陥落を実現したスルタンで征服王という別名をもつ。アヤソフィアをモスクに改修したのもこの人物。一方、アタテュルクは、オスマン朝末期の祖国解放戦争において近隣国や連合国軍の占領を打ち破き、トルコ共和国を建国した英雄。イズミル県の人々にとっては、故郷をギリシアの占領から救ってくれた恩人ともいえる。

(16) ムフテイーは、イスラーム法の解釈や適用を示す権威者のこと。

(17) アンカラ経済・商学アカデミーは後にガーズイー大学に合併される。クナジュオウル(一九二九〜二〇〇九)は、二〇〇二年、エジエヴィト政権下で約三カ月間、運輸大臣を務めた人物でもある。

(本学文学部准教授)